

# ◆連載

# いま留萌むかし

## 第 三六話

### ●アツシ判官来留

留萌支庁を廃し、開拓使札幌本庁留萌出張所を置く。明治八年のことである。

開拓使の設置から、明治五年九月宗谷支庁留萌出張所の開設に始まる留萌管内の行政機構の整備は明治六年二月宗谷支庁が留萌に移り、留萌支庁として天塩宗谷を管轄していた。しかし、開拓使の行政の効率化を計り、経常経費の抑制を計るために思い切った行政機構の見直しをする必要があった。

これは、時の開拓使次官黒田清隆が札幌本庁の前の岩村大判官の放漫経営を立て直し、開拓使を正常化するためにとった政策の一つと考えられる。そのため、岩村判官を更迭し、根室支庁詰めだった松本十郎を札幌本庁の主任官として抜擢した。この松本十郎大判官が留萌支庁の引継ぎのために明治八年六月十七日留萌を訪れている。

この松本十郎という人は留萌とは浅からぬ因縁を持っている。というのは松本判官は幕末に留萌経営をおこなった庄内藩士のひとりである。本名戸田惣十郎といい、父と共に苦前に一年、浜益に一年暮らしている。しかし、戊辰の戦争で庄内藩の中核で活躍したが、官軍に敗れ朝敵になった。その後、主君の助命のために薩長政府の中枢に運動をし、新政府に知られるようになった。特に開拓使次官となった黒田清隆にはその能力が高く評価され、開拓使設置と共に開拓判官に任命され、長く根室支庁に詰めた。

岩村判官の後任として札幌本庁詰めになってから、まず行政機構の見直しから始めたのである。このいつかが留萌支庁の廃止、留萌出張所の開設であった。この判官には多くのニックネームがつけられている。あるときは、裸で濁流を泳ぎきり「はだか判官」といわれ、アイヌの人たちのアツシを着て道内を積極的に歩きまわったことから「アツシ判官」の異名もある。また、乞食の姿をして札幌の街の巡査の横柄さをたしなめたり、街中にくらつとで、庶民の噂はなしを行政のやくにたてたという話も伝わっている。その代わり官吏には厳しくあたったため評判は良くなかったといわれる。庶民派の判官ということがいえよう。

留萌支庁の官員については非常に儉約をしており、行政能力が高いとべたほめであった。当時の留萌支庁管内の人口天塩国六郡一千六十四人、北見国四郡七百九人、合計一千五百七十三人である。これは当時の永住人口である。また、備米は出張所になっても本庁には引き上げず、本庁から遠いので、そのまま留萌に置いておいたほうが非常の際に有効であるとした。

この判官も千島樺太交換条約により樺太から北海道に移住させたアイヌの人たちの問題で黒田長官と意見があわず、開拓使を辞任し、郷里鶴岡で余生を送ったという。開拓使時代の名物判官に留萌はどのように映ったのであろうか。



松本十郎の巡回書類

松本十郎